

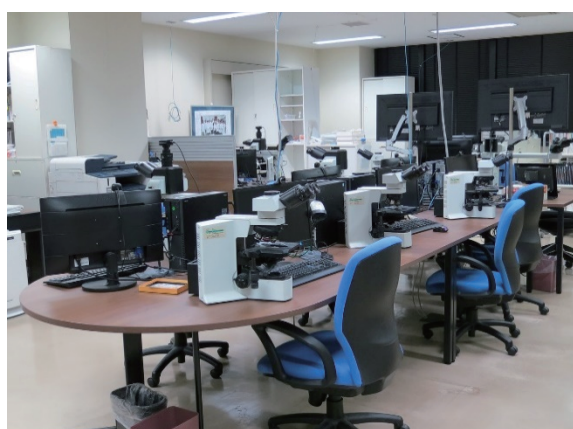
熊本大学を基幹施設とする病理専門医研修プログラム

近年、医療の高度化に伴い、病理医の役割は重要度を増しています。病理医は病理診断を行うだけでなく、治療に関する助言、医療安全の確保、医療の質の維持・向上への貢献など、大きな役割を担っています。本プログラムでは、人格・識見と技能に優れ、真摯な態度で誠実に医療に携わることのできる病理専門医を育成することを目的としています。研修基幹施設である熊本大学の病理部門は病院病理部・病理診断科、大学院生命科学研究部細胞病理学分野および機能病理学分野で構成されており、実践的な病理診断学の研修を受けることが可能であることに加え、基礎的な病態を理解するための手技、基本的な考え方を学ぶために最適な環境にあります。3年間の研修期間の1年目は大学病院、2年目以降は連携施設である熊本赤十字病院、熊本医療センター、熊本市市民病院などをローテートして病理専門医資格の取得を目指します。指導医が常駐している連携施設で研修を受けることによって、豊富で多彩な症例を経験することが可能です。施設によっては診療内容が特徴的で、乳腺病理、泌尿器病理、消化器病理などの様々な臓器・疾患領域において専門性を高めることができます。希望する専攻医は3年目に癌研究会有明病院（東京）においてがんの病理診断を集中的に学ぶことが可能で、既に2021年度に1名、2022年度に1名が研修しました。医療の高度化と技術革新に伴って病理診断学は大きく発展しており、がんゲノム医療が本格化した現在、熊本大学病院はがんゲノム医療拠点病院として、病理検体を用いた遺伝子パネル検査（Comprehensive genomic profiling: GCP）、エキスパートパネルを実施しています。従って、本プログラムではリサーチ・マインドをもった病理医を育成するため、学術的活動も奨励しています。

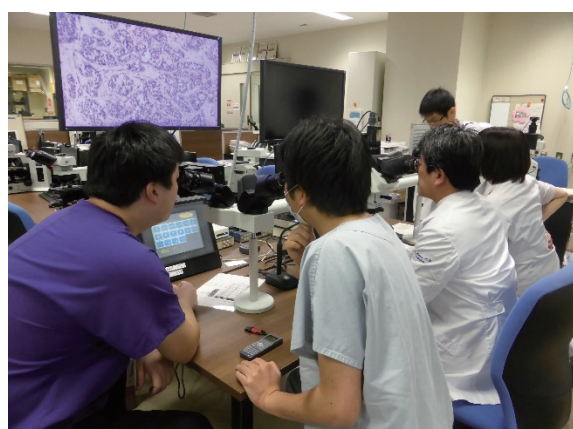
病理専門医は病理学にける総論的知識を有し、かつ各種疾患の病理学的、臨床病理学特徴を熟知し、病理診断（剖検、手術標本、生検、細胞診）を的確に行い、臨床医との情報交換・討議を通じて医療の質を担保するとともに患者を正しい治療へと導くことを使命としています。また医療に関連するシステムや法制度を正しく理解し、人体病理学の研鑽および研究活動を通じて医学・医療の発展に寄与するとともに、国民に対して病理学的観点から疾病予防等の啓発活動にも関与することが求められています。本プログラムではこの目標を遂行するために、病理領域の診断技能のみならず、臨床検査技師を含む他職種のスタッフや他診療科医師と連携しながら、教育者や研究者、管理者など幅広い進路に対応できる経験と技能を積むことも望まれます。

本プログラムにおける専門医研修は、（1）病理組織診断（生検・手術検体の診断、術中迅速診断）、（2）病理解剖の執刀および報告書作成、で構成されています。また、希望により学術活動も行うことが可能です。プログラム全体では年間約80例の剖検症例があり、組織診断も66,000件程度あるため、病理専門医受験に必要な症例数は余裕を持って経験することが可能です。また、各施設におけるカンファレンスのみならず、熊本県全体の病理医を対象とする各種検討会や臨床他科とのカンファレンスも用意されています。これらに積極的に出席して、希少例や難解症例についても学べるよう配慮しています。さらに、一定の診断能力を習得したと判断される研修者には常勤病理医が不在の病院に出向して病理診断、術中迅速診断、病理解剖などの補助を行い、経験を積む機会を用意しています。3年間の研修期間中に最低1回の日本病理学会総会あるいは九州沖縄支部の症例検討会において筆頭演者として発表することを推奨しています。さらに、発表した症例は症例報告として邦文ないし英文雑誌に投稿するよう指導します。

基幹施設である熊本大学病院病理部・病理診断科では専攻医マニュアル（研修すべき知識・技術・疾患名リスト）に記載されている疾患の標本を収集して教育用ファイルとして保管しており、その数は約 5 万枚に及んでいます。これらの標本を鏡検することによって希少な疾患について学ぶことが可能です。教科書は最新のものを揃えており、多数の医学雑誌がオンラインで閲覧可能で、必要に応じて PDF ファイルのかたちでダウンロードすることができます。また、週に 1 回（毎週火曜、午後 5 時 30 分～6 時）、スタッフによる教育セミナーを開催し、病理組織診断、細胞診、病理技術、医療安全に関するトピックスなどの最新情報をスタッフ全員で共有できるようにしています。ホームページ（<http://kuhpath.jp/>）では専門領域のコラム、教育症例の画像と解説、最新文献の紹介などが掲載されており、今後はバーチャルスライドで構成されるアーカイブも専攻医・指導医を対象として公開していく予定です。2018 年 11 月には病理診断のためのマニュアルが出版されました（『外科病理診断学-原理とプラクティス』、三上芳喜編、金芳堂）。



病理診断科鏡検室。最新の顕微鏡と病理診断システム（ExPath）を用いて PC 端末から診断報告書を電子カルテに送付しています。



術中迅速診断。病理診断科に所属する病理専門医 5 名の指導を受けながら、日常の業務の中で病理診断の基本を学び、経験を積むことができます。



教育用標本コレクション。ガラス標本（約 5 万枚）が臓器別、疾患カテゴリー別にファイルされているので、稀な疾患を含めて幅広く学ぶことができます。



図 4. 教育セミナー。毎週火曜日午前 8 時からジャーナル・クラブとクライテリア・ミーティング、午後 5 時 30 分からはセミナーを開催しています。

研修者の評価は各施設の評価責任者、基幹施設に所属する担当指導医が行います。各担当指導医は 1～3 名の専攻医を受け持ち、専攻医の知識・技能の習得状況や研修態度を把握・評価します。半年ごとに開催される専攻医評価会議では、担当指導医はその他各指導医から専攻医に対する評価を集約し、施設評価責任者に報告します。